２０２２年5月1日

「主にしっかりと結ばれて」　テサロニケの信徒への手紙一３：１～１１　佐々木佐余子

パウロが第２回目の宣教旅行の際に、このテサロニケの町に伝道に赴いたのですが、テサロニケから南に南下してアテネに着いた時、１節を読むと、「そこで、もはや我慢できず、わたしたちだけがアテネに残ることにし、わたしたちの兄弟で、キリストの福音のために働く神の協力者テモテをそちらに派遣しました。それは、あなたがたを励まして、信仰を強め」とありますが、何が我慢できないのかと考えてしまいます。それは、２章の後半に書かれています。パウロとテサロニケの信徒たちは、とても親しい関係にあったのですが、残していったテサロニケの信徒たちを気がかりになったのでした。というのも彼らは今試練にあっていたのでした。どのような試練かというと、テサロニケには幾つかのユダヤ教の会堂があるのでした。パウロはいつものように会堂に入って福音を説いた時のこと、ある者は信じてパウロとシラスに従いました。そればかりか、多数のギリシャ人や身分の高い婦人たちも二人に従ったのです。ところが、それを見てユダヤ人たちが妬み騒動を起こしたのです。テサロニケのクリスチャンたちもその騒動に巻き込まれていきました。その後、パウロたちはテサロニケの隣の町ベレアに移動し、そこで福音を説きました。そこでも、多くの人々が信じ、ギリシャ人の上流婦人も信仰に入ったので、ユダヤ人たちはまたも騒ぎを起こしたのです。ユダヤ人たちは貴族たちが信仰に入ると妬みを起こすのです。でも、その気持ちは人としてはあるかも知れません。高貴な女性、立派な衣服を着た人たちが教会に入信したら、妬みも起こすでしょう。そこでパウロたちは南に下ってアテネまで行き伝道を始めたのですが、テサロニケのクリスチャンたちは今頃どうしているか気が気でなかったのです（使徒言行録 17 章）。そこで 3 章の 1 節に入るのです。ここではテモテを派遣したとパウロは言っていますが、正しくはテモテとシラス 2 名をテサロニケに遣わしたのです。2 人はテサロニケに行き、しばらくしてコリントに戻り、パウロに報告しました。2 人はうれしい報告をしたのです。そのことが 6 節に書かれています。「ところで、テモテがそちらからわたしたちのもとに今帰って来て、あなたがたの信仰と愛について、うれしい知らせを伝えてくれました」と言っております。テサロニケのクリスチャンたちが、そういう騒動の中でも、パウロを慕い続け、3 人の伝道者たちと会いたがっているという報告を受けたのです。パウロはとても励まされました。テサロニケの教会はパウロの心配をはるかに超えて、主にあって一致していたのです。初代教会の交わりは豊かだったのです。私たちの教会もそうではないでしょうか。たとえ、その時は距離的に離れても、何かの集会で会えば、お互い懐かしくて話が弾むものです。簡単に絆は切れないのですね。以前地区の講壇交換でこちらに呼ばれた時も、懐かしい方々とお会いでき、お話し出来てとてもうれしかったです。もしかして、そういうことがきっかけとなって、今回に至ったのかもしれませんね。あの時講壇交換がなかったら、私も招聘にまで至ったかどうかわからないのではないかしら、と思います。7 節にありますが、パウロのような激しい霊的な戦いの中に置かれ、責任を持っている人ほど他の人から励ま

しと慰めを必要としているのです。「それで、兄弟たち、わたしたちは、あらゆる困難と苦難に直面しながらも、あなたがたの信仰によって励まされました」と言っています。8 節に「あなたがたが主にしっかりと結ばれているなら、今、わたしたちは生きていると言えるからです」とありますが、しっかりと結ばれているところから、どういうイメージが浮かぶでしょうか。わたしは果物のぶどうを思い出します。ぶどうは一粒ひとつぶくっついて一つの房になります。一粒づつ離れないで固く結び合っています。イエスさまは言われました。「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ」（ヨハネによる福音書 15 章） と。わたしは思い出すのですけれども、その昔、ある先生からお電話があったのです。その先生は神学校でまた、奉仕教会でお導きをいただいた先生なのですが、きっとわたしが牧師になる道から離れてしまったのではないか、と不安に思われてお電話をくださったのだと思います。わたしは年齢的に早くから神学校に行きましたが、学年の途中で家の事情により結婚してしまったのです。それでもう志も忘れ、途中で投げ出してしまったのだろうと思われたのでしょう。「あなたは今どうしているのですか？」と聞かれたので、「紆余曲折はあったけれど、いまどうにか牧師をさせてもらっています」と言ったのです。「それは良かったですね。ちょっと心配だったもので、電話してみたのです」と言われ喜んでくださいました。きっと、その先生はぶどうの木から落ちてしまったのではないかと思われたかもしれません。今、その先生は天国におられますが、懐かしい気持ちでいっぱいです。かつての教え子に電話をくださることはあまりないと思うので。パウロは言っています。「あなたがたが主にしっかりと結ばれているなら、今、わたしたちは生きていると言えるからです。」そうです。今私たちは生きているのです。ブドウのように、主にしっかりと結ばれて生かされているのです。このように七里教会がコロナの感染危機にあってもしっかりと予防して対面で毎週礼拝を守ったことは信仰に生きているからです。9 節にいきます。「わたしたちは、神の御前で、あなたがたのことで喜びにあふれています。この大きな喜びに対して、どのような感謝を神にささげたらよいでしょうか」と喜びを語っています。そして、ただ遠くからの良い知らせを聞いただけではなく、お互い顔と顔を合わせて言葉を交わし混じりあいたい、とパウロは願ったのでした。パウロはテサロニケを去った後も、ベレア地方、アテネ、コリントと伝道の旅を続けました。その間、絶え間なく続く迫害にさらされて、パウロにとってテサロニケ教会の人たちの友情は何事にも代えがたい絆だったのです。伝道者パウロにとって、自分の教え子の信仰の成長は生きる目的喜びなのでした。10 節「顔を合わせて、あなたがたの信仰に必要なものを補いたいと、夜も昼も切に祈っています」と手紙で書いています。まるで自分の子供のように夜も昼も熱心に祈っているのです。パウロは喜びの知らせを聞いて、テサロニケの人々に再会したいと切に願いました。テサロニケの教会は一難去ってまた一難であり、困難はこれからも続くと思ったのです。テサロニケの人たちの信仰がしっかりするには多くの課題があり、これでもう大丈夫ということはありえないはずです。教会は試練を通して成長するのだと思います。私は約 10 年ぶりでこちらに来て思うことは、七里教会の

成長ぶりですね。役員会お一人おひとりがしっかり役目を守って奉仕をされていると思いました。以前確か役員のなり手がなかったと思う。選挙は出来ない状態でした。今、教会総会でちゃんと選挙するのですね。それに七里教会の規則もあって驚きました。自主的に運営されているのだと感じました。役員は教会の柱ですからその柱が立てられれば教会は安定するのです。それで、七里教会は随分と成長したと感じました。

パウロは何とかしてテサロニケに行きたいと願っていました。11 節でパウロは言っています。「どうか、わたしたちの父である神御自身とわたしたちの主イエスとが、わたしたちにそちらへ行く道を開いてくださいますように」と祈りを続けています。二つ目の祈りは人々の愛が増し加わることです。そして、三つめはキリストの来臨に備えて、主イエスがすべての聖なる者たちと共に来られるとき、テサロニケのクリスチャンたちが聖なる、非のうちどころのない者としてくださるように祈っているのです。パウロは以前テサロニケの訪問が実現できないのは、サタンによる妨害があった、と言いました。2 章の１８節を読むと、「だから、そちらに行こうと思いました。殊に、わたしパウロは一度ならず行こうとしたのですが、サタンによって妨げられました」と言っています。パウロは人がどのような熱意や願望を持っていても、神が道を開いてくださらなければ不可能だと知っていたのです。またどんな難しい状況にあっても神が道を開いてくださるなら可能になることも確信していました。すべて神のご計画のうちになされるのです。パウロは「ローマの信徒への手紙」の中でとても有名な御言葉を残しています。「そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望は、わたしたちを欺くことはありません。」この希望とは主イエス・キリストのことなのです。多分パウロはテサロニケの教会の人たちを脳裏において語っているのかも知れません。テサロニケの教会が主にしっかりと結び合わされ苦難を誇りとしているように、わたしたちの教会も主に堅固に結び合わされ、お互い愛の希望を与えられて教会生活を送りたいです。